なぜ君でなくてはいけないのか: 愛の対象の代替不可能性について 大畑浩志

概要

Is love irreplaceable? If so, what condition is required for love to be irreplaceable? The two competing theories of love, reasons view and no-reasons view, differ in their approach to the question. According to the reasons view, the lovable qualities of beloved or relationships of lovers are the reasons that justify the occurrence and continuation of love. Our feeling that love is irreplaceable is also fully explained in terms of such qualities or relationships. On the other hand, according to the no-reasons view, the reasons to love either do not exist at all or at least contain elements that cannot be qualitatively described, i.e., "I love you because you are you". In this paper, I show the case of love that cannot be explained by the reasons view, and argue that particularity of the object itself is the ground of love. As a result, what will be defended is the existence of a truly irreplaceable love and a certain kind of no-reasons view which captures it.

The flow of this paper will be as follows. First, we survey the debate between the reasons view and the no-reasons view, and set up a framework for our discussion (Section 2). Then, we examine how the no-reasons view and reasons view explain our feeling that love is irreplaceable (Section 3). Next, by taking up the case of love that cannot be explained by the reasons view, we show that there is truly irreplaceable love which is such that only the no-reasons view can capture (Section 4). Finally, we conclude that love toward the individuality of the beloved is to be understood as a volitional attitude, not an emotional one (Section 5).

Keywords: reasons of love, emotion, volition, Harry Gordon Frankfurt, Niko Kolodny.

^{*} CAP Vol. 13 (2021) pp. 107-123. 受理日: 2021.6.10 採用日: 2021.11.5 採用カテゴリ: 原著論文 掲載日: 2021.11.19.

1 はじめに

エミリー・ブロンテの恋愛小説『嵐が丘』に登場するキャサリンは、二人の男性への愛で板挟みになっている。エドガーはハンサムで優しく裕福であり、彼との結婚は幸せが約束されている。だがキャサリンは、ヒースクリフに対する理由のつかない強い想いを断ち切ることができない。彼女の屋敷の使用人であるネリーはキャサリンに対して、エドガーへの想いは代替可能なものであり真正の愛ではないと示唆する。ハンサムで優しく裕福な人と一緒になりたいのなら、相手はエドガーでなくても良いからだ。ここでキャサリンやネリーが直面している問いはきわめて一般的なものである。愛は本当に代替不可能なものなのだろうか。もしそうだとするならば、愛のかけがえのなさはどこからやってくるのだろう。

愛をめぐる現代の議論においては、「理由説(reasons view)」と「無理由説(no-reasons view)」が競合している。理由説によれば、個人の魅力的な質や二人の間の好ましい関係性が理由となって、愛のはじまりや継続が正当化される。愛はかけがえがないという我々の実感についても、対象の質や対象との関係性の観点から十分に説明される。他方の無理由説によれば、愛の理由はまったく存在しないか、少なくともそこには質的に記述され得ない要素が含まれている。たとえば「あなたがあなたであるから愛している」といったような。本稿において私は、理由説では説明のつかない愛の事例を提示し、対象の個別性そのものが愛の根拠になると主張する。結果として擁護されるのは、真に代替不可能な愛の存在と、それを捉える無理由説的な愛の理論である。

本稿の流れは次のようになるだろう。まず理由説と無理由説の論争状況を概観し、議論の枠組みを設定する(第2節)。さらに、愛はかけがえがないという我々の実感に対して、無理由説と理由説がどのような説明を与えるのかを確認する(第3節)。次いで、理由説では説明のつかない愛の事例を取り上げることで、単なる実感ではなく実際に代替不可能な愛が存在することを示し、それは無理由説のみが捉えられると主張する(第4節)。最後に、「愛されるものの存在それ自体」に向かう無理由説的な愛は、感情ではなく意志的態度として理解すべきだと結論づける(第5節)。

2 理由説と無理由説

本節ではまず、愛の理由を認める理由説を概観する。愛の理由は何らかの価値に基づくとされるが、価値がどこに見いだされるかをめぐって理由説はさらに二分される。一方の見解によれば対象が持つ質に価値が置かれ、他方の見解によれば対象との間に築かれた関係性に価値が置かれる。このような理由説内部の意見の相違を見たのち、愛の理由を認めない無理由説の主張を検討する。

2.1 理由説:質説と関係性説

手はじめに恋愛の場面から「なぜ私はあなたを愛しているのだろう」と問うてみよう。相手の魅力的な特徴がいくつも思い浮かぶ。優しさや美しさ、ユーモアのセンスに知性、それから趣味が合うことなど。愛する人(beloved)すなわち愛が向けられる人はこうした特徴を有していて、私はそれに惹かれている。こうした

事態から我々は、愛の本性について次の仮説を立てることができる。

(1) 愛は、ある主体が好ましいと評価した何らかの価値に基づく態度であり、またそうした価値は愛にいたる理由を形成している。

(1)を受け入れ愛に理由を認める立場は、一般に理由説と呼ばれる。その支持者であるコロドニー [Kolodny 2003: 137]によれば、理由説が正しいと思われる根拠は少なくとも三つある。第一に、愛のただなかにいる当事者の一人称的観点から、自らの愛は理由に基づいた適切なものだと言えること。第二に、他人の愛を眺める三人称的観点から、ある場合における愛の有無が適切あるいは不適切だと感じられること。たとえば、暴力をふるうパートナーを持つ人はそのパートナーを愛すべきでない理由があるとか、親はいかなる場合であれ子を愛すべき理由があるといった事例がそうだ。第三に、すべての感情は理由を持つという前提と、愛は感情であるという前提の二つから、愛は理由を持つという結論が導かれること。たとえば、感情の一種と思われる恐怖が身に迫る危険を理由として生じるように、愛も感情であるならばそれを生じせしめる理由を持つと考えられる。

コロドニーのこうした洞察から示されるように、愛の議論において取りただされるのはある種の規範的な理由である。すなわち、愛のはじまりや継続の単なる因果的原因ではなく、その適切さないしは正当性を保証してくれる理由の存在が争点となっている。もっとも愛の理由の規範性は、たとえば道徳的行為を促す理由の規範性などと比べてはるかに主体相対的な側面が強い。理由説の代表的論者であるケラーは、自説が「人間を愛すべき人と愛すべきではない人に分けることはない。[…]我々は特定の恋人に相対的に愛されうるのでしかない」[Keller 2000: 171]とはっきり述べている。愛にどの程度の客観的正当性が求められるかは論者によって意見が分かれるものの、多かれ少なかれこうした考えは理由説に共有されている*1。

理由説の主張の核は(1)に尽きる。だが価値評価の向かうところをめぐって、理由説はさらに二分される。まず一方の「質説(quality view)」によれば、愛の対象が他の存在に依拠せず持っている質的特徴に価値が置かれる。我々はしばしば人の優しさや美しさに惹かれるのであって、こうしたありふれた愛の実践に照らせば、質説は自然な立場だと思われるだろう。そして質説の最大の利点は、悪徳な人間を愛すべきでない理由をただちに与えられることだ。たとえばテロリストへの愛が適切でないと感じられるのは、まさにその当人が悪徳な人間だからだと言える。このようにして質説は、愛についての我々の日常的見解をうまくすくいあげる。

質説と対になるのが「関係性説(relationship view)」である。関係性説によれば、個人の特徴ではなく、

^{*1} 本稿が愛の理由を「規範理由(normative reason)」と呼ばないのは、メタ倫理学の行為論における規範理由との混同を避けるためである。行為論では規範理由ではなく「動機付け理由(motivating reason)」として分類されるような、単に主体の信念と欲求に基づくだけの理由であっても、愛の理由としては基本的に認められる。愛の理由の主体相対性を強調する理由説論者としてジョリモア[Jollimore 2011]やナー[Naar 2017b and 2021]、ムーア[Moore 2018]を挙げておこう。またそのことを踏まえると、伊集院[2018: 48-50]が示唆するように、愛の理由の規範性を強くとった上での理由説批判は藁人形論法に陥る可能性がある。本稿での理由説の定義もそのような危惧を反映している。

二人の人間同士の間に築かれ継続されている何らかの関係性に価値が置かれる。ただし、恋愛や友情と親子愛では、愛を正当化する「関係性」として念頭に置かれるものが異なっている。親子愛の場合、生物学的ないし社会制度的に決定された「親子関係」の存在が愛を正当化する。このことから、親が子を愛するのは子がまさに自らの子だからなのであって、子が魅力的な特徴を備えているからではない、という説明が与えられる。他方で、恋愛や友情において重視されるのは、当人たちの間で時間をかけて構築された「歴史的関係性」である*2。よって、たとえば「クラスメイトだった」といった関係性は、少なくともそれ単独では愛の理由を構成しない。二人で何かを達成したとか、一方の困難を他方が救ったとか、そういった出来事の連なりによって育まれた歴史が愛の理由となる*3。

質説と関係性説はそれぞれ一長一短なところがある。質説にしたがえば、愛の対象の誠実さなどからただちに愛の適切さが導かれる一方で、愛の継続は扱いづらくなる。愛する人とそっくりな別人と出会ったり、愛する人の特徴が変化したりしても、こうした事態に耐えて愛が続くことを説明するのが難しい。他方で関係性説にしたがえば、愛しあう二人の独特の関係性から愛の継続はうまく説明されるように思える。しかし関係性が続いている以上、これまで温厚だった相手の突然の豹変による愛の終焉を説明するのは難しい[cf. Smuts 2014b: 521; López 2018: 177-8]。さらに加えて、恋愛を正当化するのが「二人で育まれた歴史」とする見方は、「片想い」や「一目惚れ」といったかたちの愛を不当に排除してしまうという懸念も表明されている[cf. Price 2012: 224; Brogaard 2015: 93; Protasi 2016; Kroeker 2018: 281]。

2.2 無理由説

さて、理由説に対して(1)を棄却するのが無理由説である。無理由説いわく、愛は質や関係性に対する価値評価ではなく、そのような意味で合理性や正当性のような概念から切り離される。ある論者の表現を借りれば、「あなたの愛は非合理的(irrational)なのではなく無合理的(arational)なのであり、それは理由のスコープを超えている」[McKeever 2019: 211]とされる。無理由説を導く議論としては、愛の個別性と非道徳性に着目したものが知られている。無理由説の代表的な支持者とみなされるフランクファート[Frankfurt 1998 and 2004]によれば、愛は個人の存在それ自体にまっすぐ向けられるのであり、人の資質に基づいて選択的に生じるようなものではない。さらには、「人が誰かを愛するようになることは、その誰かの固有の本性が実際に、そしてまったく悪いものだと認識していたとしても可能である」[Frankfurt 2004: 38]とさえ言われる。また近年は、こうした無理由説の見解を補強する議論もいくつか提出されている。たとえば、悪徳な人を愛する不適切さは、愛それ自体の正当性に訴えずとも説明できることや[cf. Smuts 2014a: 101-3]、愛の原因はあまりにも多様であるから共通の「愛しうる(lovable)特徴」を抽出することは困難であることが指

^{*2} 関係性説の代表的な支持者であるコロドニー[Kolodny 2003: 149]は、親子関係と恋愛/友情関係の違いを強調して、前者を「態度依存的でない関係」、後者を「態度依存的な関係」と区別している。なお、本稿以下の議論はもっぱら恋愛を中心に進められるので、我々の関心は基本的に態度依存的な関係に集中するだろう。

^{*3} 質説はケラー[Keller 2000]やロペス[López 2018]によって、関係性説はコロドニー[Kolodny 2003]やグロー[Grau 2010]、プライス[Price 2012]によって積極的に擁護されている。なお、ヴェルマン[Velleman 1999]の立場が質説的に分類されることがあるが[cf. Helm 2021]、彼の主張は「カント的人格のみが愛の理由となりうる」というもので、愛が人の誠実さや優美さへの評価だとする見方とは大きく異なることを付言しておく。

摘されている[cf. Pismenny and Prinz 2017]*4。

以上が理由説と無理由説の基本事項となる。ごくシンプルに言えば、理由説は愛を正当化する理由の存在を肯定し、無理由説はそれを否定する。だが双方の理論にはまだ突き詰めるべき点がある。まず理由説について言えば、やはり先ほども触れた愛の客観的正当性が悩みの種となる。愛の理由にはいわゆる「良い理由」や「悪い理由」はあるのだろうか。より具体的に考えると、愛の主体が対象に好ましい価値を見いだしていたとしても、それが何らかの意味で悪いものであるがゆえに――たとえばあまりにフェチ的であるとか――非難されるようなケースはあるのだろうか*5。また無理由説についてもまだはっきりとしない点がある。愛が何の理由もなく生じるとすれば、それは自由気ままに生成/消滅するものとなり、愛の実態からかけ離れたものになるのではないか。さらにこうした恣意的で制御不可能な衝動としての愛は、無理由説の説く個人の存在そのものに対する関心からもかけ離れてしまわないか*6。

こうした愛の恣意性の問題については次節ですぐ取り扱い、無理由説の二つのバージョンを区別することでその問題の解決方針を提示する。ただし理由説が抱える問題についてはこれ以上踏み込まず、本稿は理由の良し悪しについては考慮しない。本稿の問題関心は、愛の道徳性というよりもその個別性にあるからである。またそうした関心に基づいて理由説に不備はないかを調べる場合、愛の理由はできるだけ広く認めた上で議論を進めた方が良いはずだ。したがって以下では、少なくとも愛の主体が対象を魅力的だと評価しているならば、そうした主体相対的な価値は(それがどのようなものであれ)愛の理由になる、と前提しておきたい。もちろん他の議論によってこのような前提が排される可能性を、我々はけっして否定しない。

3 記述可能な理由と命名可能な理由

ここまで、愛をめぐる理由説と無理由説の論争状況を概観した。以上を準備として、愛のかけがえのなさの検討へと移る。本節ではまず愛の対象は代えがきかないと実感されるケースを提示し、それに対する無理由説の見解をみる。無理由説はたしかにこうしたケースを首尾良く説明できるが、その成功は特定のタイプの無理由説に限られるだろう。こうした無理由説の検討に次いで、理由説の見解を確認したい*7。

恋愛/友情/親子愛といった愛が、価値評価を超えて対象そのものに向けられているように見える場面はいくつかあるはずだ。そもそも親子愛はそういうものだと言われるだろうし、恋愛や友情に関しても、

^{*4} 近年の無理由説論者はスマッツ[Smuts 2014b]、ザングウィル[Zangwill 2013]、ドライ[Drai 2016]、ハン[Han 2021]など。

^{*5} たとえば愛の道徳性を重視するエイブラムソンとライトは、「つやめく髪や申し分のない顔形によって誰かを愛することは、すぐに未熟で浅はかだとわかる形態だ。」[Abramson and Leite 2011: 678]と一蹴している。さらに続けて、愛の理由として認められるのは、真正の道徳的気質が表出された人の特徴やふるまいだけだといった主張が展開される。

^{*6 「}無理由説に基づくと愛が恣意的になる」という旨の批判は多くの論者によって展開されてきた[cf. Jollimore 2011: 136; Bagley 2015: 6; 伊集院 2018: 36-7]。

^{*7} 以降の議論では基本的に恋愛を中心に扱う。だが本稿で最終的に提示される理論は恋愛だけでなく友情や親子愛にも敷衍されることが望ましいし、私は実際そうなっていると信じる。親子愛については注11も参照のこと。なお祖国愛や人類愛、神への愛などは本稿の守備範囲ではない。

対象の(かならずしも良い方向ではないような)変化に耐えて愛が継続することはありうる[cf. Kroeker 2018: 277]。また逆に人々の多様な魅力につられて好きな人が次々と増えていくような状況は、ある論者に言わせるとあまりに「ゆきずり的で無節操(promiscuity)」[Jollimore 2011: 16]であり愛の実態にそぐわない。とりわけ次のようなケースは、愛の対象の個別性ないし代替不可能性を顕著に示すようにみえ、愛の理由を論じる文献の中でも頻繁に引かれる。

ソラリスケース*8

宇宙飛行士であるケルヴィンは、妻のハリーを愛している。ある日、地球から遠く離れた惑星ソラリスに降り立ったケルヴィンは、そこで妻とまったく同じ特徴を持つ別人ハリーBと出会う。ハリーBはハリーと同じ見た目と性格的特徴を持ち、記憶すら同じである。けれども、ケルヴィンがハリーBを愛することはない。それはケルヴィンにとって妻への裏切りだと感じられる。

上記の物語は現実ではまず生じないようなSFに過ぎない。だが我々はケルヴィンがハリーを愛し続けることをたしかに理解できる。言いかえれば、もし我々がケルヴィンの立場だったなら、困惑しつつも彼と同じように振る舞っただろうと言える。ではこのような愛について、理由説および無理由説はどのように説明するだろうか。

まず無理由説から検討していこう。フランクファートは愛する人の個別性を強調して次のように述べている。

人間の愛の焦点は、愛する人を記述可能(describable)にするような、普遍的かつ複現可能な特徴ではない。むしろ愛の焦点は、愛する人を命名可能(namable)にするような特定の個別性である。そうした個別性は記述可能性よりもミステリアスな何かであり、いかなるケースにおいても定義できないことは明らかだ。[Frankfurt 1998: 170]

愛はそのもっとも中心的な部分において、愛されるものの存在とそのものの利益に対する利害関係抜 ・・ きの関心である。[Frankfurt 2004: 42]

フランクファートの考えに沿えば、ソラリスケースは次のように説明されるだろう。すなわち、ケルヴィンの愛はハリーの「特定の個別性」ないし「存在そのもの」に向けられているから、ハリーとどれほどそっくりなハリーBに出会ったとしても愛は揺らがない。彼はいわば「ハリーがハリーだから愛している」のだ。

しかしここで、前節の終わりで触れた無理由説についての懸念、つまり恣意性の問題が思い出される。 ケルヴィンは、ハリーBに対してハリーを能動的に「選んだ」とは言えないのではないか。なぜなら、もし愛

^{*8} 本ケースは、スタニスワフ・ムフが 1961 年に発表した SF 小説『ソラリス』に着想を得ている。なお、愛する人の質的特徴が複現されるケースは愛の理由論でかならずといっていいほど論じられるが、特に『ソラリス』を扱うものとしてミリガン [Milligan 2013]やグロー[Grau 2014]がある。

が理由なく湧き上がる衝動のようなものであるならば、それは突然ハリーからハリーB に切り替わったかもしれないからだ。

こうした懸念を真剣に受けとめ、我々は次のように考えたいと思う。愛をめぐる議論において無理由説が受け入れないのは、対象の質や対象との関係性への言及により、広い意味で質的に(qualitatively)表現される理由である。これを記述可能な理由と呼ぼう。これに対して私の整理では、質的に記述され得ないタイプの理由が存在する。こちらは対象の個別性に基づく理由であり、典型的には「彼女はほかならぬハリーその人である、だからハリーを愛している」といった仕方で対象の固有名を用いて表現されるだろう。非質的に(non-qualitatively)表現されるこの理由については、フランクファートの言い回しにしたがって命名可能な理由と呼ぶことにしたい*9。(より正確には、命名しかできない理由であるが。)そして少なくともフランクファートが唱えたような無理由説の要点は、(記述可能な理由の否定というよりもむしろ、)命名可能な理由に基づく愛の擁護にあると私は考える。このタイプの無理由説は、愛のはじまりや終わりについてはさしあたり置いておくとしても、少なくともその継続については命名可能な理由が保証してくれる。したがってソラリスケースにおいては、ケルヴィンは「ハリーがハリーである」という彼女の個別性に基づく理由によって彼女への愛を貫いたことになる。(とはいえ、これで恣意性の問題が完全に解決されたとは言えないだろう。詳細については第5節で論じる。)

もっとも、質や関係性が形成する理由ではないにせよ、何かしらの理由を認める立場を無理由説と呼ぶことはミスリーディングに響くだろう。本稿の整理において無理由説は、もはや単純に「愛には理由がない」と主張する立場ではなくなっている。しかしそれでも、命名可能な理由と記述可能な理由の間には大きな隔たりがある。そのもっとも顕著な違いとして、命名可能な理由は比較できないという点が挙げられる。一般的特徴に由来する記述可能な理由については、「あなたは親切だけれど、あの人の方がもっと親切だ」(だからあの人を選ぶ)といった仕方で比較可能だろう。しかし、「対象の個別性どうし」を比較して優劣をつける基準などありそうもない。さらに言えば、「あなたの親切さよりもあの人の個別性の方が優れている」といった仕方で、記述可能な理由と命名可能な理由を比較することもできないだろう。それゆえ、命名可能な理由が一種の「理由」であったとしても、それは理由説が求めるような、愛する人の選択の合理性を与えるものとは決定的に異なる。こうした点から我々は、命名可能な理由を認める立場を「無理由説」のもとに置くことにする。

なお、あらゆるタイプの愛の理由を認めない(文字通りの)無理由説も原理的には主張可能である。こう した見方において愛は、主体の意図とは関係なく生起するものとなり、たとえば空腹感のような状態に近 づいていく。だがそうすると、愛のはじまりはもちろんのこと継続にすらなんの根拠も与えられなくなり、そ の継続は完全に「たまたま」なものとなってしまう。こうした見方は、日常的な愛の見方から大きく外れてい ると言わざるを得ない。また実際に、無理由説的な傾向のある論者の多くは、命名可能な理由に大まかに

^{*9} ここでの「質的」と「非質的」の違いは、しばしば形而上学で置かれる「質的性質」と「非質的性質」の区別を念頭に置いている。それらの厳密な定義は難しいものの、「ソクラテス性」のような固有名や指標詞を用いなければ表現できない性質が非質的性質であり、それ以外の色や形といったありふれた性質が質的性質であると基本的には理解される [cf. Cowling 2015]。

相当する何かを認めることで、ランダムに生起する衝動と愛を切り離そうと試みているように見える。たとえばノージック[Nozick 1989]であれば、愛の結合による「わたしたち(we)」の形成といった具合に。よって我々は以下、あらゆる愛の理由を退けるのではなく、命名可能な理由だけは認める立場を指して無理由説と呼ぶことにしたい。

このようにソラリスケースは、命名可能な理由を認めるタイプの無理由説を後押しするが、では理由説に対してはどのような影響を持つだろうか。質説に対する脅威となるのは間違いない。ハリーの質はハリーBに対して複製されているから、ケルヴィンはハリーと同様にハリーBを重要視して愛するはずだが、そうはなっていない。しかし関係性説ならばこうした困難は生じない。ケルヴィンがハリーと地球で築いた関係性は、ハリーBとの関係性とはまったく異なるからだ。彼にとってハリーの方が重要な存在であるのは、ハリーとの長い歴史に訴えることで容易に説明される。したがってソラリスケースを考える限りでは、命名可能な理由を措定する必要はなく関係性でこと足りる。付け加えて言えば、本節の冒頭で触れたような、愛する人が次々と増加しないことについても、当人との固有の関係性が簡単に説明してくれるように思われる。

4 愛の代替不可能性

ここまでの議論では、愛はかけがえがないという我々の実感は、命名可能な理由を持ち出すまでもなく対象との関係性によって説明できた。もっとも、関係性説でも説明が難しいのは、同程度に価値のある関係性が複数の人と築かれていながら、それでいて愛がそのうちのひとりのみに向けられているケースである。我々が苦境から脱したり何かを達成したりするのは、つねに同じ人のサポートによってとは限らない。愛がめばえても不思議ではないような関係性が複数の人々と育まれることはあるはずだ。しかしその上で特定の個人のみを愛したとすれば、このとき愛の選択は何に由来するのだろう。その決め手が個人の質であるとすれば、これは頑固な関係性説論者にとっては都合が悪い話だとしても、理由説そのものの否定には届かない。なぜなら理由説は、愛の理由として個人の質と二人の関係性の両方を認めてしまえば良いからだ。そうしたハイブリッドな理由説においては、価値が見いだされるのは、対象の質か対象との関係性か、あるいはその両方であるかのいずれかだ。こうした見方にしたがえば、ある二人のうち一方を愛し他方を愛さないケースにおいて、両人との間に築かれた関係性が同等であるとしても、その二人の質に違いがあれば問題はない*10。

しかしこのように議論を進めると、さらに次のように問いたくなる。ある二人が質的にも関係性的にも同等であるにもかかわらず、その一方のみに愛が向けられているケースは考えられないだろうか。そのようなケースがあるとすれば、理由説では説明の及ばない愛の存在が浮き彫りになり、我々は命名可能な理由の考慮へと促されるだろう。私の考えでは、以下が実際そのようなケースになっている。

^{*10} 質説と関係性を何らかの仕方で融合させた理論は、近年さまざまなタイプが矢継ぎばやに提唱されている[cf. Abramson and Leite 2011; Bagley 2015; Hurka 2016; Protasi 2016; Naar 2021]。 そうした理論のいずれもとも両立するような弱い融合理論を想定して、ハイブリッドな理由説は置かれている。

ループケース*11

1940年6月にキリヤとリタは出会い、仲を深めて二人は結婚する。だが1945年、東京の空襲によってリタはキリヤの目の前で亡くなってしまう。悲しみに暮れるキリヤはそのまま意識を失う。次にキリヤが目を覚ましたとき、なぜかカレンダーは1940年のはじまりを告げていて、時間が巻き戻ったようにみえる。キリヤの身体は完全に当時のままで、記憶だけが引き継がれている。キリヤはふたたびこちらの周期におけるリタ――リタ B と呼ぼう――と出会い、その喜びのまま時間が巻き戻る以前とまったく同じようにふるまうことでリタ B と結ばれる。そしてふたたび訪れた1945年、彼はリタ B を東京から避難させ、彼女を救おうと試みる。そこでリタ B は、なぜ東京から避難させるのかと問う。キリヤはそこで、以前の周期で生じたことをそっくりそのままリタ B に伝える。するとリタ B は悲しい顔をして次のように告げる。あなたが本当に愛していたのは、時間が巻き戻る前のリタであってこの私ではない。あなたがどれほど私を気にかけてくれたとしても、私はあなたが東京で失ったリタの代わりにはなれないし、なりたくないのだ、と。

まず上記の物語で起こっていることを正確に把握したい。これは映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』で描かれたような昔の自分自身に会いに行けるタイムトラベルではない。キリヤが意識を失う前の 1940 年と目覚めたあとの 1940 年は、どれほどそっくりだとしても別の世界であり、したがって厳密に時間が巻き戻ったわけではない。そしてその点にさえ注意すれば、この二つの世界の実際の身分はどのようなものであっても良い。たとえば、二つの世界はいわゆる「パラレルワールド」のようなもので、キリヤは意識のないままにある世界から別の世界へと飛ばされたのだと考えても良いし、あるいはひとつの世界の中で 1945 年を起点として「リセット」が起こり、キリヤの記憶だけが引き継がれ二つの周期ができたと考えても良い。

いずれにせよ、本ケースにとってもっとも重要なのはリタ $_B$ の最後の台詞である。我々は彼女の台詞を真に迫るものとして理解できるし、ここには何かしら普遍的な愛の本質が含まれていると思われる。ならばこのループケースは、ハイブリッドな理由説でも説明できない事例となる。なぜか。まずリタとリタ $_B$ の質的特徴、そしてキリヤが彼女たちと築いた関係性は、それぞれまったく同等のものである。そしてそうだとすれば、それらについての価値評価は異なり得ないのだから、キリヤがリタを愛するに至る理由はリタ $_B$ を対象として複製されている。したがって、キリヤがリタを愛しているとすれば、彼はリタ $_B$ も同様に愛しているはずだ。だがリタ $_B$ の最後の嘆きは、キリヤが本当に愛しているのはリタだけであるし、自分はリタの代わりではないと述べている。彼女の嘆きが正しいことを伝えているとするならば、我々は愛の記述可能ではない理由、固有名を用いなければ表現できない理由を考慮しなければならない。すなわちキリヤの愛の理由には、「リタがリタであること」という命名可能な理由が含まれている。この命名可能な理由は、リタとリタ $_B$ が別個の対象である以上複製され得ない。したがってリタ $_B$ が正しく述べるように、キリヤはリタ $_B$ を愛しているとは言えない。

理由説は次のように応答するかもしれない。キリヤがリタを愛していたならば、質や関係性が複製されている以上リタBのこともまた愛さなくてはならない。あるいはリタBの嘆きに反して、キリヤはすでにリタBをちゃんと愛していたのかもしれない。いずれにせよループケースは、単に愛すべき対象を愛せていないこと

^{*11} 本ケースは、桜坂洋が 2004 年に発表した SF 小説『ALL YOU NEED IS KILL』に着想を得ている。

を示しているか、あるいはリタ B はすでに愛されているのであって、命名可能な理由はこのケースに関係しない。

次のように再応答したい。理由説の主張にしたがい、以下ではキリヤがリタ $_B$ をすでに愛していたと(あるいはリタ $_B$ を愛すべきだと感じたと)仮定しよう。それで一件落着だろうか。けっしてそうではない。リタ $_B$ は単に愛されていないことを嘆いているのではなく、自分はリタの代わりではないと主張している。我々は、仮にキリヤがリタとリタ $_B$ の両方を愛していたのだとしても、リタ $_B$ がリタの代わりではないことを説明しなければならない。ソラリスケースにおいては、ハリー $_B$ がハリーの代わりではないことは、ケルヴィンとハリーの間に築かれた価値ある関係性によって説明することができた。しかしループケースにおいては、キリヤが二人の女性と築いた関係性はまったく同じである。だとすれば、リタとリタ $_B$ への「愛の違い」を生み出しているのは命名可能な理由だと考えるほかない。

ここまでの議論において我々は、キリヤが二人の女性と築いた関係性はまったく同じであることを前提としてきた。関係性がいわば普遍者として複現されているからこそ、それらを価値づけることから彼女らに対する愛の違いが出てこないのだ。しかしここで、「関係性が複現されている」という前提を訝しむ向きもあるかもしれない。キリヤが彼女たちと築いた関係性はそれぞれ異なっていて、しかも愛の違いがそうした関係性の違いにしっかりと基づいているとすれば、我々は関係性説だけで十分うまくやっていけるだろう。以下ではこのような考えを吟味し、それでもなお命名可能な理由が必要とされることを見る。

問題となっている二つの関係性は、どのように異なりうるだろうか。まず、キリヤとリタとの間には「リタとの関係性」があり、リタ B との間には「リタ B との関係性」が築かれているから、それらに対する価値評価は当然異なるという見方があるだろう。たしかにこれらは数的に異なる個別的関係――形而上学の分野ではトロープ(trope)とみなされる関係――として理解できる。しかし両関係が数的に異なるとしても、それらは質的差異のない「完全にそっくりな個別的関係」である。だとすれば我々は、「二つの関係性が完全にそっくりであるにもかかわらず、それらに対する価値評価が異なるのはなぜか」を問わねばならない。ここで両関係を表現する際の「リタとの」ないし「リタ B との」といった部分に着目してみると、関係性に対する評価の違いは、彼女たち自身に対するキリヤの態度の違いに由来するとみなせるかもしれない。しかしそうすると今度は、関係性に対する価値評価に対して、リタやリタ B という個体に対する価値評価が先行することとなる。だとすれば、「リタとの関係性」や「リタ B との関係性」がそれぞれ別個の愛の理由となるためには、まずリタやリタ B を別々の人間として愛さなければならない。彼女たちの質的特徴はそっくりなのだから、ここにおいてやはり命名可能な理由が必要となるだろう*12。

^{*12} ここでの関係性説批判は、関係性説にしばしば寄せられる「誤った焦点の問題(problem of the wrong focus)」と部分的に類似している。誤った焦点の問題とは、「関係性が大切だから人を愛するというのは順番が逆であって、愛する人との関係性だから大切に感じるのだ。それゆえまず、関係項である人(の質)を愛さねばならない」という旨の批判である[cf. Smuts 2014; 伊集院 2018: chap2; Naar 2017b and 2021]。ただし本稿は完全にそっくりな関係性を扱い、単純に関係項と関係の先行性を問う以上の批判を展開している。たとえば、誤った焦点の問題に対する次のような解決策は、ループケースの問題への対処としては不十分である。ナー[Naar 2017b and 2021]いわく、「ある対象 x との間に実際に育まれた関係性の中においてのみ顕在化するような x の質」が愛の理由となる。またこの質は、対象の代替不可能性を説明してくれる特別な役割を持つとされ、I-性質と呼ばれる[cf. Naar 2021: 999]。ナーは、関係性ではなくあくまで質が理由となるわけだから、誤った焦点の問題を回避できると主張する。しかし、ナーの見解が愛の「焦点」を射抜いて

次に、関係性の違いは世界ないし周期の違いに基づくという見方を検討してみたい。議論の仮定として、キリヤの身に生じたことは「パラレルワールド間の移動」だとしておこう*13。キリヤが意識を失う前の世界を w1 とし、目を覚ました後の世界を w2 とする。このとき、キリヤとリタとの間には「w1 における関係性」があり、キリヤとリタ B との間には「w2 における関係性」がある。ならばこうした関係性の違いから、リタとリタ B への愛の違いを説明できるかもしれない。もちろん、「w1 における関係性」と「w2 における関係性」は完全にそっくりではある。しかしそれらを価値づけることは、先ほど見た戦略のように、リタやリタ B 自身に対する価値づけを直接的に要求するわけではなさそうであり、そうした点でこの見方はいくらか有望に見える。

しかし、完全にそっくりな両関係に対する評価の違いがどこから生じるのかは、依然として問題である。その違いの源泉として考えられるのは、両関係の「w1 における」ないし「w2 における」という部分に着目した際にたどり着く、世界それ自体に対する評価の違い以外にないだろう。すなわち、「w1/w2 における関係性」がそれぞれリタ/リタ $_{\rm B}$ に対する愛の理由となるためには、まず w1 や w2 をそれぞれ別個に大切にしなければならない。しかしこれは奇妙な事態である。なぜならここでは、キリヤはまず先に世界を大切にする必要があって、その後ではじめて w1 や w2 の住人としてのリタ/リタ $_{\rm B}$ を愛することになるからである。キリヤは明らかに、w1を愛することでリタを愛していたわけではない。むしろ事情は逆であるとさえ言える。すなわち、キリヤが w1や w2 を個別的に大切にできるとすれば、それは彼が w1 や w2 で大切な何か―このケースではリタやリタ $_{\rm B}$ 一を見つけた場合でありその逆ではない。そのことは、たとえばキリヤが戦争で勝利したいだけであれば、彼はリタにもリタ $_{\rm B}$ にも配慮することなく、w2 以降も時間がループすることを願うだろうと言えることからもはっきりする。以上より、「w1/w2 における関係性」が別々の愛の理由となるためには、リタやリタ $_{\rm B}$ 自身に対する個別的な愛が先行しなければならないことがわかる。彼女たちに質的差異は見出せないのだから、そうした愛は命名可能な理由によってはじめて捉えられるものである*14。

いたとしても、なお我々はループケースを通じて、「二つの関係性が完全にそっくりであるにもかかわらず、それらを通じて異なるI-性質が顕在化するのはなぜか」を問うことができる。リタとの関係性とリタBとの関係性で同じI-性質が顕現するとすれば、それらに対する価値評価は異なり得ず、愛の個別性は救えない。ナーの見解に対しては注 19 でも触れる。

^{*13} ループケースを二つの周期の発生として解釈したとしても、以下の議論は適切なパラフレーズによってそのまま成立する。時間がループする以前の 1940 年 6 月から 1945 年までの期間を p1 とし、時間がループしたのちの 1940 年 6 月から 1945 年までの期間を p2 とすれば良い。

^{*14} ここでは、個体の個別性から愛の個別性をトリビアルに引き出すことはできないことが前提されている。すなわち我々は、一部の理由説論者が陥っているように[cf. Keller 2000: 165]、愛の理由と愛の対象を区別することで問題がすべて解決するとは考えていない。「愛は本当にかけがえのないものなのか」といった問題に対して、愛の対象が個別者であるという明白な事実だけからイエスと答えることはできないからだ。だがその上で、ひとつ注意を要する愛がある。親子愛である。親子関係はそれ単独でかならず代替不可能な愛を形成する(べきだ)と考えるのは、難しいことではない。いま我々には二つの道がある。ひとつは上記の考えを受け入れ、親子関係の成立と子ないし親の個別性から愛の代替不可能性がただちに引き出されるとする道。もうひとつは上記の考えを否定し、親子愛も恋愛や友情と本質的には変わらないと考えて、親や子への愛およびその代替不可能性を実質的な仕方で与えようとする道である。もちろんこのとき、親子関係がきわめて強力な愛の動機付けとなることまで否定されてはいない。この二つの道のうち私は後者に傾いているが、ここはオプショナルにしておく。なお、親子愛の規範性を積極的に否定する論者としてプロタージ[Protasi 2018]がいる。

5 意志と表象としての愛

これまでの議論では、記述可能な理由では汲み尽くせず、命名可能な理由を持つような愛が積極的に 検討された。ところで、記述可能な理由は質や関係性への価値評価から形成されていた。これに対して、 命名可能な理由はどのような態度から形成されるのだろうか。あるいはまた、これまで棚上げにしてきた次 のような問題もある。命名可能な理由の存在を示すループケースは、あくまで極限的な事例に過ぎない。 本稿の冒頭で見たように、日常的な愛の営みは間違いなく理由説的に説明されるはずである。ではこうし た日常的な愛の姿と、対象そのものへの関心という理念的な愛のギャップをどう埋め合わせるのか。

まず私が本稿で提案する無理由説は、質や関係性に対する評価という日常的な愛の営みを否定するものではない。それどころか、愛が対象の存在それ自体へと向けられるためには、まず対象の質や対象との関係性を適切に評価するプロセスが必要となるだろう。つまり、命名可能な理由に基づく愛に至るにはまず価値評価が先行しなければならない。そのゆえんを確認するために、対象の変化に耐えて愛が持続するというケースや、ソラリスケースやループケースなどの、無理由説が動機付けられるような場面を振り返ってみたい。こうしたケースにおいては、愛する人の質や関係性について、その変化や消滅や複現が強調されていた。このことから、次の重要な事実が引き出されるはずである。我々は、「変化」や「複現」といった仕方で強調された質/関係性を目の当たりにすることによってはじめて、対象のかけがえのなさを意識し、その個別性を愛することができる。より日常的な場面に即して言えば、我々の愛がいわば「試される」のは、相手の性格や見た目が変化したとき、相手との別れがやってくるとき、相手とは別の魅力的な人物に出会ったときなどであろう。こうした場面においてこそ「それでも愛が続くか」が問われるのだとすれば、我々はまず質や関係性に対する評価を行い、その後で愛がそれ以上のものかどうかを問うてみる必要がある。つまり命名可能な理由は、愛のはじまりを説明することはできず、その継続の根拠にのみなり得る。

さらにまた、対象それ自体への愛に対して価値評価が先行するという事実は、先ほど触れた「命名可能な理由はどのような態度から形成されるのか」という問いに対してひとつの見通しを与える。この本丸の問題に取り組む前にまず、価値評価的な次元における愛から考えよう。こちらは基本的に感情(emotion)として分析できるはずだ。もちろん感情とは何かという巨大な問題は残されているが、少なくともここでは、感情が価値的性質を何らかの仕方で表象する機能を持っていればそれで良い。我々は、恐怖によって何かを危険だと表象するように、怒りによって自分や世界に対する不正を表象するように、愛によって何かを魅力的だと―より直接的に言えば愛しうると―表象する。そのようにして、相手の質や相手との関係性が価値あるものとみなされる。しかし、命名可能な理由に基づく愛を感情として分析するのは困難だ。愛されるものの存在それ自体は、感情によって捉えられるものではない。というのは、感情によって表象される優しさや美しさのような魅力と、相手の個体性はまったく異なるものだからだ。その根拠としてここでは、前者は知覚可能な性質に何らかの仕方で基づいている(たとえばスーパーヴィーンする)と考えられる一方、後者はにわかにはそう思われないという一般的な見方を挙げておこう*15。もうひとつ付け加えるならば、相

^{*15} 感情によって捉えられる価値的性質が知覚可能な性質にスーパーヴィーンするという見解については、信原[2017: chap.2]で明快に解説されている。なお、個体性の存在論的基盤については、さまざまなオプションがある。たとえばそ

手の魅力的な特徴がこちらの鼓動を速めるような仕方で、相手の個体性がこちらの何らかの身体変化を引き起こすこともない。

対象それ自体へ向かう愛が感情ではないとすれば、それはいったいどのような心的状態なのか。無理由説と親和的な心的状態としては、「欲求(desire)」[cf. Han 2021]や「情念(passion)」[cf.Smuts 2014b]、「症候群(syndrome)」[cf. de Sousa 2015; Pismenny and Prinz2017]そして「意志(will/volition)」[Frankfurt 2004]が挙げられる*16。もし我々が無合理性を愛の本質とみなすのであれば、欲求説や情念説、症候群説に軍配を上げるべきだろう。愛をそのようなものとみなす論者は基本的に、多かれ少なかれ愛が我々の「コントロールの外部にある」[Smuts 2014b: 523]ことや、愛の対象の選択に「単なる因果的説明」[Han 2921: 121]しか与えられないことを強調する。しかし我々はいま、あくまで愛の個別性を救おうとしている。そして上述の議論が正しければ、ある対象を固有のものとして愛そうとする態度は、質や関係性に対する価値評価的プロセスを経た上で、少なくとも一定程度コントロール可能な仕方で主体的ないし能動的に選び取られるものだと思われる。だとすれば、そのような愛の見方にもっともかみ合うのは意志説だろう。愛の本質であるこの意志は、愛の対象の変化/消滅可能性などを織り込んだ上で、それでもこの愛が続いて欲しい、愛する人を比較対象にしたくないと願うような態度として育まれていくだろう。つまり感情の営みがあってはじめて、意志の形成が促される*17。

しかしここで、次のような批判が提起されるかもしれない。愛の開始に記述可能な理由を認め、その継続にのみ命名可能な理由を用いる意志説は、しかし実のところ恣意性の問題をまったく回避できていない。なぜなら、愛に命名可能な理由が含まれる条件については何もわからないのだから、愛が感情的段階から意志的段階に移行するタイミングが恣意的なものとなるからだ。たとえばソラリスケースにおいて、ケルヴィンがハリーBと出会いその価値を評価したのち、すぐにハリーBを固有の存在として愛そうと意志したとしよう。たとえ価値評価が先行していたとしても、こうした愛は非合理的かつ作為的でおかしなものに感じられるはずだ。地球にいるハリーが惑星ソラリスにやってきて、「なぜあなたはハリーBを愛しているのか」と問い詰めたとき、ケルヴィンが「彼女はほかならぬハリーBだからだ」と命名可能な理由を挙げたとしても、その意志に至った合理的理由が与えられない以上、ハリーは納得できないはずだ。(合理的理由があったとしても納得できないだろうが。)

こうした批判に対してまず私は、上述の恣意性を自らの理論から取り除くことができないことを正直に認

れは、ものの性質の担い手としての「裸の個物」ないし「基体」かもしれないし、あるいは「ソクラテス性」などとして表現される「このもの性」かもしれない。しかしいずれにせよ、それらが知覚可能とは考えづらい[cf. Loux and Crisp 2017: 102]。

^{*16} スマッツ[cf.Smuts 2014b]は、愛を「心情(sentiments)」とも表現している。ただし心情とは「感情を持つ傾向性である」 [Prinz 2004: 189]などと一般には理解され、感情と比較的近い心的状態とも受け取られるため、ここではスマッツの無理由説的見解を尊重し彼の「情念」という表現を採用した。愛を一種の傾向性とみなす見解については[Naar 2017a] を、本文で挙げられた各理論のより詳細な検討については伊集院[2018]を参照。

^{*17} 我々は第3節で「命名可能な理由だけを認める立場」として無理由説を考えたので、その基準にしたがえば、ここで 擁護されたのは結局のところ理由説と無理由説のある種のハイブリッド理論となる。とはいえ、意志的な愛こそが愛の 名にふさわしく、日常的な愛の営みはあくまで「愛に漸近する試み」なのだと理解すれば、(やや強引な仕方ではある が、)本稿の理論はあくまで「無理由説」の枠内にとどまるだろう。感情的な愛は本当のところ愛ではなくなるからであ る。

めなければならない。第3節でも触れたように、命名可能な理由が記述可能な理由と比較検討されるものではない以上、愛が感情的段階から意志的段階へと移行する正確な条件は定められない。さらにそのことと関連して、意志的な愛の継続ないし終了の決定の合理性も究極的には問い得ない*18。上述の例を振り返れば、ハリーと共に我々がケルヴィンの愛を恣意的だと感じたとしても、それは愛には違いないと言わねばならない。私が命名可能な理由を認めながら、なお自らの立場を無理由説と位置付けているのは、まさに上述の条件が(少なくとも客観的には)定まらないことにあるとさえ言える。

ただ、もし仮に意志的な愛を措定する積極的な根拠があるとすれば、愛が感情的な段階から意志的な 段階へと移行する条件の定まらなさは、意志的な愛の否定をただちに導くことはないだろうと私は考えて いる。そのことは、たとえば「砂粒の集まり」と「砂山」の境界を定めることがたとえ困難だとしても、それらが 二つの異なった対象だという考えをすっかり捨て去るのは困難であることと類比的である。ある人は、ほん の少ししか積まれていない砂のかたまりを指して「これは砂山だ」と主張するかもしれない。それは多くの 人の基準ではおかしいように思える。けれどもそうしたケースの存在を重く見て、我々の存在論ないし意 味論から砂山という対象を完全に排除してしまうことは相当に改定的な作業である。これと同じように、ある 状況においてはきわめて恣意的に映ったとしても、そのことによって意志による愛がいっさい認められな いとすれば、その不認可は愛を理解する上で大きな損失となるかもしれない。

そして私の考えでは、意志的な愛を措定する積極的な根拠はたしかにある。まずはやはり前節で見たような、質や関係性を超えた愛を仮定してはじめて説明が与えられる事例を挙げておきたい。しかしここでは、意志的な愛を措定するより実質的な意義について述べておくことにする。その意義とは、仮に愛がまったき感情であり相手の価値評価に尽きるのだとすれば、我々の愛はどこに向かっているのかがわからなくなってしまうということだ。対象の変化や入れ替わりに左右されない愛というのは、そうでない愛と比較して(より優れているかどうかはさておき)少なくとも強靭なものであり、そして我々の愛はその地点に向かって営まれている。私のこのような理解は、実際のところ理由説論者にさえ共有されていると思われる。だからこそ理由説の支持者たちは、愛の代替不可能性をすっぱりと諦めることはせずに、関係性などの「対象のかけがえのなさを説明してくれて、かつ質的な性質」を探し求めているのだろう*19。前節で見たようにそ

^{*18} 本稿では愛のはじまりと継続については論じたが、その終了について深く論じることは叶わなかった。対象の個別性に基づく「命名可能な理由」が、愛の終了とどう結びつくのかというのは難しい問題である。「意志が折れる」という事態によって、すなわち命名可能な理由がなくなることによって愛が終わることは考えられるだろう。けれども、「あなたがあなたである」ということ自体が愛の終了の理由となりうるかについては、現時点では回答を保留しておきたい。ただひとつ確実に言えるのは、命名可能な理由は愛の対象の選択に寄与しないということである。第3節で述べたように、対象の個別性同士を比較する基準などないからだ。もちろん、ある主体が命名可能な理由による愛を複数の人と築いていながら、なおそのうちのひとりだけと交際するといった状況は排除できないが、こうした状況は対象の個別性とはかかわらない理由(モノガミー的規範など)によって生じるものであろう。

^{*19 「}対象のかけがえのなさを説明してくれて、かつ質的な性質」を探求する試みは、注 12 でも論じたナー[Naar 2017 b and 2021]の議論に典型的である。ところで、注 12 でナーの議論が扱われたとき、完全にそっくりな関係性から異なる I-性質(愛の対象のかけがえのなさをもたらす性質)が顕在化することはないだろうとされた。だが仮にそれが(根拠なく)可能なのだとすれば、ナーの立場と私の無理由説の相違は薄れてゆくだろう。ナーは I-性質の候補として「人間性」や「(特定の人に固有の)徳」などを挙げているが、それは私が本稿で強調した「個別性」(ないし注 15 で触れた「このもの性」)と同じく比較不可能となり、愛の対象のかけがえのなさをもたらすことになる。もっとも、ナーの想定する I-性

うした探求が失敗に終わるとすれば、恣意性の困難を飲み込んだとしても、愛の営みが目指すひとつの終着点として、命名可能な理由に基づく意志的な愛が措定されなければならない*20。

まとめ

愛はかけがえがないのか。もしそうだとすれば、愛が代替不可能だとされるのはどのような条件によってか。そうした問題に取り組むにあたって、愛の本性についての二大理論、理由説と無理由説をまず確認した。理由説によれば、愛は価値評価によって形成される理由、すなわち記述可能な理由を持つ。他方で無理由説は記述可能な理由を否定し、「あなたがあなたであるから愛している」という命名可能な理由だけを認める。そのように整理すると問題は、愛する人はかけがえがないという我々の実感は、記述可能な理由だけで捉えられるのか、あるいは命名可能な理由まで必要とされるのか、である。我々は後者の考えに立った。というのも、二人の対象に記述可能な理由が完全に複製されていながら、その一方のみに愛が向けられているがゆえに、命名可能な理由を考慮せねばならないケースがあるからだ。つまり真に代替不可能な愛が存在し、そうした愛は命名可能な理由を持っている。では命名可能な理由に基づく愛はどのように生じるのか。愛の営みはまず価値評価を伴う感情からはじまる。だが愛はいつしか、対象をその人自身として愛そうとする意志を含むことがある。このような、相手の個体性に対する意志から命名可能な理由が形成される。つまり、意志に基づく愛が代替不可能な愛である。

謝辞

本稿執筆にあたっては、佐金武、高野保男、藤田明伸、雪本泰司、横路佳幸の各氏、そしてとりわけ二名の匿名の査読者からきわめて有益なコメントをいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

参考文献

- [1] Abramson, K., & Leite, A. (2011). Love as a Reactive Emotion. *The Philosophical Quarterly*, 61(245), 673–699.
- [2] Bagley, B. (2015). Loving Someone in Particular. *Ethics*, 125(2), 477–507.
- [3] Brogaard, B. (2015). On Romantic Love: Simple Truths About a Complex Emotion. Oxford University Press.

質の方が、荒っぽく言ってこのもの性などよりも「中身のある」性質ではあるだろうが。

^{*20} 本稿で扱うことができなかった意志説の困難として、「愛の相互発展的側面を捉えられない」という問題がある。すなわち、自分が相手に愛を伝えようと試み、それによって相手もまた自分にレスポンスに返す、そのようにして(成就するにせよ失われるにせよ)発展していく愛の双方向性を、意志説は捉えられないというものだ。こうした批判が意志説に対する決定的な打撃となるのか、あるいは一方向的な愛と双方向的な愛を区別する何らかの原理を意志説の中に組み入れられるのかについては、今後見定めていきたい。

- [4] Cowling, S. (2015). Non-qualitative Properties. Erkenntnis, 80(2), 275–301.
- [5] de Sousa, R. (2015). Love: A Very Short Introduction. Oxford University Press.
- [6] Drai, D. (2016). Is Love Based On Reasons? European Journal of Analytic Philosophy, 12(1), 5–26.
- [7] Frankfurt, H. G. (1998). Necessity, Volition, and Love. Cambridge University Press.
- [8] Frankfurt, H. G. (2004). The Reasons of Love. Princeton University Press.
- [9] Grau, C. (2010). Love and History. The Southern Journal of Philosophy, 48(3), 246–271.
- [10] Grau, C. (2014). Love, Loss, and Identity in Solaris. In S. Wolf & C. Grau (Eds.), *Understanding Love: Philosophy, Film, and Fiction*. Oxford University Press.
- [11] Han, Y. (2021). Do We Love For Reasons? *Philosophy and Phenomenological Research*, 102(1), 106–126.
- [12] Helm, B. W. (2021). Love. In E. N. Zalta (Ed.), *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Fall 2021 Edition, https://plato.stanford.edu/archives/fall2021/entries/love/
- [13] Hurka, T. (2016). Love and Reasons: The Many Relationships. In K. Schaubroeck & E. Kroeker (Eds.), *Love, Reason and Morality*. Routledge.
- [14] Jollimore, T. (2011). Love's Vision. Princeton University Press.
- [15] Keller, S. (2000). How Do I Love Thee? Let Me Count the Properties. *American Philosophical Quarterly*, 37(2), 163–173.
- [16] Kolodny, N. (2003). Love as Valuing a Relationship. The Philosophical Review, 112(2), 135–189.
- [17] Kroeker, E. (2018). Reasons for Love. In A. Martin (Ed.), Routledge Handbook of Love in Philosophy.
- [18] López, R. G. (2018). In Defense of Trait-based Love. European Journal of Philosophy, 26(1), 169–194.
- [19] Loux, M. J., & Crisp, T. M. (2017). Metaphysics: A Contemporary Introduction. Routledge.
- [20] McKeever, N. (2019). What can we learn about romantic love from Harry Frankfurt's account of love? *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 14(3), 204–226.
- [21] Milligan, T. (2013). The duplication of love's reasons. *Philosophical Explorations*, 16(3), 315–323.
- [22] Moore, D. (2018). Reconciling Appraisal Love and Bestowal Love. Dialogue, 57(1), 67–92.
- [23] Naar, H. (2017a). Love as a Disposition. In C. Grau & A. Smuts (Eds.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Love*. Oxford University Press.
- [24] Naar, H. (2017b). Subject-Relative Reasons for Love. *Ratio*, 30(2), 197–214.
- [25] Naar, H. (2021). The possibility of fitting love: Irreplaceability and selectivity. *Synthese*, 198(2), 985–1010.
- [26] Nozick, R. (1989). Love's Bond. In The Examined Life Philosophical Meditations. Simon & Schuster.
- [27] Pismenny, A., & Prinz, J. (2017). Is Love an Emotion? In C. Grau & A. Smuts (Eds.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Love*. Oxford University Press.
- [28] Price, C. (2012). What is the point of love? *International Journal of Philosophical Studies*, 20(2),

217-237.

- [29] Protasi, S. (2016). Loving People for Who They Are (Even When They Don't Love You Back). European Journal of Philosophy, 24(1), 214–234.
- [30] Protasi, S. (2018). "Mama, Do You Love Me?": A Defense of Unloving Parents. In A. Martin (Ed.), *The Routledge Handbook of Love in Philosophy*. Routledge.
- [31] Smuts, A. (2014a). Is it Better to Love Better Things? In T. Milligan, C. Maurer, & K. Pacovská (Eds.), *Love and Its Objects*. Palgrave Macmillan.
- [32] Smuts, A. (2014b). Normative Reasons for Love, Part II. Philosophy Compass, 9(8), 518–526.
- [33] Velleman, J. D. (1999). Love as a Moral Emotion. Ethics, 109(2), 338–374.
- [34] Zangwill, N. (2013). Love: Gloriously amoral and arational. *Philosophical Explorations*, 16(3), 298–314.
- [35] 伊集院利明. (2018). 『愛の哲学的構成』. 晃洋書房.
- [36] 信原幸弘. (2017). 『情動の哲学入門:価値・道徳・生きる意味』. 勁草書房.

著者情報

大畑浩志(大阪市立大学文学研究科)